

芭蕉の“木啄も”の句について

— 発想契機を中心として —

宇和川 匠助

(教育学部・国文学研究室)

(I)

木啄も庵はやぶらず夏木立

これは“おくのほそ道”に掲出されている句で、仏頂禅師の旧庵だけに、さすがに木つつきもその庵をつつき破らず、今もなお夏木立の中に残っているという仏頂の高徳をしのんだものであるとするのが^(注1)一般的な解釈である。だからその制作動機についてはあまり問題はなさそうであるが、実はこの作品の素材となっている“木啄”“庵”“夏木立”などについて、これまでの評釈書には、いろいろ異なる見解が示されているのである。

(注1) “新釈奥の細道” 木村架空. “俳句講座発句篇” 加藤鞏郎. “全釈奥の細道” 山崎喜好など.

(II)

“庵は破らず”の仏頂の庵の位置についても、仏頂の遺跡は幸い石窟であったので、木つつきもつつき破らず夏木立の中に昔のままのすがたで残っている^(注2)。としたり、あるいは、木つつきもこの山庵の小さくそまつなのを侮ってか、つつきこわしもつつき破りもしなかったとみえる^(注3)など、というたぐいの解釈がある。これでは庵がたまたま石窟の中にあたり、あるいは小さすぎて、木つつきの目にふれなかった結果、昔のまま残っているというのであって、仏頂の高徳をしのぶというこの作品の制作動機が確実に把握されているとはいえない。

(注2) “通講奥の細道” 斎藤清衛. (注3) “奥の細道創見” 勝峯晋風.

(III)

“木啄”という鳥についても、木つつきは俳諧では秋のものとされている。しかるに芭蕉が雲岸寺を訪ねたのは初夏だから木つつきはいるはずがない。だから作者はよくも木つつきがこれまで庵を破らなかつたものと追想的にいったまでだとしたり^(注4)、この木つつきは作者が仏頂に対する敬慕の心もちをいい現わさんがための手段として、観念的にかりてきたまでである^(注5)。というような説があるかと思うと、芭蕉がこの庵を訪れたときには現実に木つつきの木をつつく音が夏木立の中に聞えていたのだとする評釈書もある^(注6)。

(注4) “奥の細道新釈” 三浦圭三. “俳句講座紀行篇” 横沢三郎. (注5) “奥の細道評論” 荻原井泉水.

(注6) “奥の細道の新しい解釈” 岩田九郎.

(IV)

“夏木立”という季語についても、“夏木立”はほとんど季の形式的条件を満たすための道具ではない^(注7)。というのに対して雲岸寺がうっそうたる夏木立の中にあつたという実景をそのまま現わしている季語であつて、よくきいているすぐれた表現であるといっている人もいる^(注8)。

(注7) “奥の細道” 頼原退蔵. (注8) “芭蕉” 山本健吉. “奥の細道新解” 井本農一.

(V)

これは動かないだろうと思われる、仏頂の高徳礼讃というモチーフについても若干の差異が認められる。これは高徳礼讃というよりはむしろ庵主と木つつきとの親密な関係を表現しているのだから、木つつきが仏頂の高徳をしたって庵を破らないのだということになるとあまりに解釈が穿ちにだしてしまう^(注9)。師の仏頂をなつかしと思う情が中心であって、師弟という人間関係における親愛感が主である^(注10)。というような解釈がある。これは仏頂を尊ぶという心情ではこの句の一般の解釈とははなはだしくはなれたものとはいえない。

しかるに土橋寛^(注11)はこの句の発想は仏頂の高徳讃美などというよりも、これは師僧に対する一種の挨拶の心もちであって、それを本格的な心構えをもって作っている個性的な芸術的作品と同じように見ようとすることは、芭蕉の歴史的位置に対する的確な認識を欠いている。これは芭蕉が軽い気持ちで“庵は破らず”とユーモラスに洒落れたのであって即興句である。そこにはまじめくさった芭蕉の顔よりむしろ旧師の跡を訪ねることの楽しい表情が認められるとっている。

これは土橋寛が、この句の地の文の“とりあへぬ一句を柱に残侍し”とある。“とりあへぬ”という表現に眩惑され、これを文字どおり受けとったことから生じた皮相的見解であると思う。このことは後で述べる芭蕉真跡の詞書、黒羽における紀行文の全体的な構成におけるこの雲岸寺の部分の占めるウェイトなどを考慮に入れると無理であることがわかる。

(注9) “芭蕉”山本健吉。(注10) “奥の細道評釈”志田義秀。(注11) “奥の細道新解”土橋寛。

(VI)

ここに特異な解釈がある。それは成田恒二郎^(注12)の解である。成田恒二郎は、この句の発想を探る端緒としてまず本文の“豎横の五尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせば”という仏頂作の解説からはじめている。この歌の“雨なかりせば”の雨は単に降雨という意味だけのものではなく、うちに俗世間的な欲望、いわゆる煩悩濁の意味をいにかけている。すなわちこの雨は煩悩の雨であり、歌の本旨はそこにあるのであって、一般にいわれている一所不住行雲流水というような解はこの歌の本旨を逸脱したものである。したがってこの歌意は、たてよこ五尺に足らぬその土地での求道にいそむ身に悪く煩悩解説の苦しみの心がそこにかがえるのである。そしてこの歌が芭蕉の“木啄も”の句の序ことば的なはたらきをしているのであって、したがってこの句の発想のモチーフにこの歌が有力にはたらいているとしている。

成田恒二郎はこのように仏頂の歌と芭蕉の句との関連において、その発想契機を探ろうとしているのであるから、芭蕉の句の木つつきについても“木つつき伝説”^(注13)を重視している。

木つつきはこの伝説によって別名モリヤともいわれているのであるが、物部守屋を漏屋にいかけ、さらに彼が排仏派の中心人物であったので守屋の怨霊を“寺つつき”ともいわれているのである。そこで守屋ということばのうらには仏頂の歌の雨の漏屋、すなわち煩悩ということが考えられていたのである。それが芭蕉に“木啄も庵は破らず”のごとく、仏教に障碍する寺つつきでさえもさすがに高徳の僧の住いた庵はつつき破らなかつたのだという発想を呼び出したのであるとっている。また芭蕉のこの作品の「木啄」は雨の漏屋とする木つつきとしてだけではなく、同時に屋を守る木つつきとしてもいいかけられているとして、この作品の発想のモチーフを次のように説明している。「芭蕉が直接耳にした仏頂の和歌や“木啄も”の句を含むあたりの文章を綴るとき、人名としての守屋や、屋を守る意味での守屋、また仏頂の歌のところで述べた雨の漏屋などのことはおのずから心にのぼせていたに相違なからうと思うし、句中の“木啄も”“庵はやぶらず”などのことばのひびきにもそうした暗示はにじみ出ているだろうと思う。」

(注12) “奥の細道の木啄もの句の発生に関して”，国語研究，33号。

(注13) “盛衰記”巻10, “守屋木啄鳥となる”——仏法に反対した物部守屋の怨霊が十万羽の木啄鳥となって天王寺の堂舎をつつき滅ぼそうとしたが聖徳太子が鷹と変じて彼を降伏させたという伝説——。

(VII)

この解釈は宗教的観念に偏っていて、この作品のもつ文学性を軽視しすぎているそしりをまぬがれない。なるほど仏頂の和歌の解などはうなずかれる点もあるが、それはもともと一種の宗教歌であるから、その歌に宗教的観念が露出しているのは当然であって、それに合致するような解釈は是認されてもよいが、“木啄も”の句解にまでこれを及ぼすことは宗教的観念を前提としてみるのあまり、作品の人間的文学的な面が無視される結果となっている。

木つつき伝説の寺つつきを木つつきが庵を守って、これをつつきこわさないで守っている守屋にかけていっているとみるところにもけんきよう附会な無理がでている。

芭蕉は後年、“幻住庵記”の中で“木つつきのつつくともいとはじ”などといっているが、木つつきは庵などを現実につつき破るものとして彼が受取っていたことが知られるのである。

(VIII)

わたくしはこの句の発想契機が、芭蕉の仏頂に対する人間的ななつかしさと尊敬の心情の表現であることは動かないと思う。それが単になつかしきだけの感情であったり、即興的な洒落であったり、またあまりにも宗教的な観念の表現であったりするものでないことは、次の三点から実証することが可能であると信じている。

その一つは、“おくのほそ道”の黒羽における紀行文構成の順序が、旅の事実に忠実ではなく虚構と思われる点のあることである。黒羽の記事は“夏山に足駄を拜む首途哉”を中心とする前段と、この“木啄も庵は破らず夏木立”の句を中心とする後段とに分かれているのであるが、これは芭蕉の旅の事実に反しているのである。曾良の“隨行日記”によると芭蕉が余瀬の翠桃を訪い、館代浄法寺図書に招かれて、その翌日にまず参詣したのは雲岸寺である。“夏山に”の句のように光明寺に行ったのはその翌日であり、那須の篠原見物、金丸八幡宮参詣などはさらに後日のことである。この事実は何を意味するかといえば、芭蕉が黒羽を訪れた目的の第一が翠桃を訪ねること、そしてそれとほとんど同一の比重で、あるいはそれ以上に恩師仏頂が山居していたという雲岸寺を訪ねることであった。光明寺や八幡参詣のごときは、むしろ偶発的なより道に過ぎなかったのである。したがって芭蕉はこれらの付属的事項は“夏山に”の句を中心とする前段に手ぎわよくまとめ、後段には大きくウェイトをもたせて“木啄も”の句を文末にすえて紀行文を構成しているのである。この事実からみても仏頂に対する尊敬と親愛感が黒羽訪問の芭蕉の心の大部分を占めていたことを推察するにたたくない。わたくしはここにこの句の発想契機を探ることができると思うのである。

(IX)

第二には、雲岸寺の紀行文を味読することによって理解される。わたくしは芭蕉の心の露頭をつぎの文に読みとる。“松の灰して岩に書付侍り、といつぞや聞え給ふ。其跡みんと雲岸寺に杖を曳ば…”というところと“さてかの跡はいつくのほどにやと、後の山によちのほれば”というところにははっきりと出ている。“その跡みんと”と“さてかの跡はいつくのほどにや”という二文は照合して彼の仏頂に対する尊敬と親愛の情があふれているのであって、この心情が“木啄も”の句を産む原動力となっていることは疑いをいれないのである。

第三にはこの作品の芭蕉真蹟^(註13)の前書に注意する必要がある。それによると「たてよこの五尺に足らぬ草の戸をむすふもくやし雨なかりせは、とよみ侍るよし、兼て物かたりきこへ侍るを、見

しはききしに増りてあはれに心すむばかりなれば、“木啄も庵は破らす夏木立”」であって、“おくのほそ道”の雲岸寺のところとは若干の異同があるが、わたくしはこの真蹟句文切れの“見しはききしに増りてあはれに心すむばかりなれば”という部分に作者の真情が吐露されていて、このモチーフがごく自然なかたちでつぎの句をみちびきだすものとなっていることを知るものである。

(注13) 勝峯晋風旧蔵，“奥の細道で残された芭蕉の真蹟”岡田理兵衛。(解釈と鑑賞，昭32.3)

(X)

このようにみてもこの句が単に即興的なあいさつ句であるとは思われない。しみじみとした仏頂への親愛の情が“庵は破らず”という語調によく表現されていることがわかる。本文の“とりあへぬ一句を柱に残待し”とある“とりあへぬ”ということばだけをとりはずして文字どおりに解すると軽い即興というような解釈もあるいは出てくるかも知れぬが、前に述べた三点を考慮に入れて読めば、この“とりあへぬ”は即興的というよりは、尊敬と親愛の情を表らわさんとして、しかもその意をつくさないもどかしさを自分にいきかせるような心持がみられるのであって、決して軽い気持などで一句を残したという程度のものではない。その意味ではむしろ、この句は観念的な重さとおぼろげのある作品であって、一句としての独立性も弱く、あるいは失敗作といえるかも知れないほどのものである。

(XI)

作品の制作動機さえしっかりとおさえておきさえすればはなはだしい誤解は生じないと思う。たとえば庵の位置についても、庵が石窟の中にあつたので、木つつきがつき破ることができなかったのだというような解は理屈にはまったみかたであって、それでは芭蕉が“ききしにまさりてあはれに心すみて”というような感動をこめてうたった仏頂との、あたたかい人間関係などは抹殺されてしまうのである。また地形的にも庵が岩洞の中になつたことは、河東碧梧桐^(註14)や荻原井泉水^(註15)も書いていることであるし、井本農一^(註16)は「仏頂和尚山居の跡に行ってみる。若い禅僧の案内で庫裡の裏手に廻る。もう裏山がすぐ迫っている。山寄りへちょつと登ったところに二三十坪の細長い平地がある。山の方の片側は岩が聳え立っている。岩窟にむすびかけたりと、本文にあるのは岩の方へびったりと寄せて庵が建っているさまをいったものであろう。狭い土地であるから後の岩崖の方へ寄せて庵が建てられていたに相違ない。今は何となく廻りには樹木が茂り、平地には雑草が生えている」と記述しているが、これはまったく芭蕉の文をうら書きするものである。“石上の草庵岩窟にむすびかけたり。妙禅師の死関、法雲法師の石室をみるがごとし”と書いているように、芭蕉は妙禅師、法雲法師の石室になぞらえて、仏頂の草庵をみているのではあるが、岩洞の中に庵があつたとは書いていないのである。

(注14) “三千里”碧梧桐。(注15) “奥の細道を探ねて”井泉水。(注16) “奥の細道をたどる”井本農一。

(XII)

木つつきが観念上の鳥か、それとも現実の鳥であるかということも、この作品の発想と深い関係がある。木つつきを追想的によんだとする横沢三郎説はまだよいとしても、荻原井泉水の仏頂尊敬という観念をあらわすための手段として木つつきを詠んでいるという考えかたは、観念的という点では成田恒二郎の木つつき伝説による宗教的観念で、この句をみている考え方とあまり距離は認められない。

ここはやはり膺寒い山奥、秋の鳥の木つつきを屈目したとしても不自然ではない。あたりの静寂の中で木つつきの木をつつく音がしきりにしているとする山本健吉、井本農一、岩田九郎の木つつ

き属目説を妥当とせねばなるまい、それがこの句の創作契機にも合致し、この句の文学性を生かした解釈というべきである。だがここでわたくしのつけ加えたいことは、それが単純な一重の世界としての属目吟ではないということである。芭蕉もこの頃の作品になると、現実と観念の渾然たる暗喩象徴の世界が開けているのであって、この作品のごときも属目の木つつきに伝説上の木つつきが二重うつしになり、さらにそれが仏頂の高徳礼讃と三重うつしになっているとみたいのである。

芭蕉の代表的作品が凡てそうであるように、この作品も実景を踏まえながら、その背景にある種の観念を蔵しているのである。“夏草や”という実景が“兵どもが夢の跡”という観念語と結合して“夏草や兵どもが夢の跡”となり、“青葉若葉の日の光”に“あらたうと”という宗教的観念が具象化されて、“あらたうと青葉若葉の日の光”となり、“雨に西施がねぶの花”に“象瀉や”のうらむがごとき裏日本の地勢観念が結合具象化されて、“象瀉や雨に西施がねぶの花”となっているように、“木啄も庵はやぶらず夏木立”とうたった詩法もまったく同様であるといっていよい。

(XIII)

この句の夏木立が形式季語か、実景かということについても、やはり実景とみるのが正しいと思う。頼原退蔵は、木つつきが俳諧では秋の景物とされているので、強いて別に当季の景物をとり入れる必要があったとしている。そして禪師の法器をたたえようというある観念から出発したような場合には、夏木立はほとんど形式的条件をみだす道具立にすぎないのである。句の可否はとにかく芭蕉の制作心理に立ちいって考えれば、彼は木つつきの音は聞いたかも知れないが、夏木立については実は最初から感激をもっていなかったにちがいないといっている。だがわたくしはこの夏木立が小庵を描き出すための重要な背景となっていることを疑いたくない。それはこの句の地の文の“山はおくあるけしきにて、谷道遙に松杉黒く苔したたりて卯月の天猶寒し”という記述は、芭蕉にとって夏木立が雲岸寺詣では特に印象的であったことを物語るものであり、夏木立のもつ語感が回想と荒廃と静寂をもたらすにふさわしいものであることを思うべきである。また庵の位置が夏木立の中にあつた事実は碧梧桐、井泉水、井本農一のひとしくいっているところである。

庵の位置が岩壁を背後にしてむすびかけられた小庵であつたこと。その小庵はあわれに心すむばかりの夏木立の中にあつたこと。かすかな木つつきの音などもきこえていたこと。このような三つの現実の素材を構成して、そこに仏頂に対する親愛と尊敬の心情を傾注しているのがこの作品である。かりにこの三つの素材のうちいずれが詩的想像によって虚構されているかと問われれば、それは木つつきであろうと答えたい。そしてこの木つつきの背後には、寺つつき伝説がかくされているとみることは自由である。そして寺つつきでさえも仏頂の悟りの境地を破るものではなかつたという宗教的観念があやうく露出せんとする寸前におかれながら、それが芭蕉のたくみな詩法によって観念化されることなく、生き生きと具象化され象徴化されて、この作品に深い含蓄をもたせていることに注意すべきである。

(1960・8・15)

(昭和35年9月10日受理)

